

2015年度目録委員会記録 No.8

第8回委員会

日時：2015年12月12日（土）14時～17時

場所：日本図書館協会

出席：渡邊委員長、木下、河野、田代、津田、野美山、古川、村上、横山
<事務局>磯部

[配布資料]

1. 今後の予定に関する検討メモ（2015.12）（2ページ-A4、渡邊委員長）
2. 注記の検討状況（1ページ-A4、平田委員）
3. IV部 関連 42章 資料に関する主要な関連（5ページ-A4、平田委員）
4. 第IV部 関連 43章 資料に関するその他の関連（5ページ-A4、平田委員）
5. #5 ユニット X.7 表現形（表記の形式）（18ページ-A4、野美山委員）
6. 関連指示子：著作、表現形、体现形、個別資料の間の関連（13ページ-A4、河野委員）
7. 第IV部 D.0～.2 資料と個人・家族・団体との関連（第7次案）（11ページ-A4、古川委員）
8. 序説・総説・属性総則に関するメモ（2015.12版）（8ページ-A4、渡邊委員長）
9. 新NCR序説（2015.12案）（10ページ-A4、渡邊委員長）
10. 第I部 第0章 総説（2015.12案）（10ページ-A4、渡邊委員長）
11. セクション1 第1章 属性総則（2015.12案）（27ページ-A4、渡邊委員長）
12. 2015年度第7回目録委員会記録（案）（6ページ-A4、木下委員）

[報告事項ほか]

1. 今後の予定について
資料1をもとに、完成までのスケジュールと作業について再確認した。
 - ・2016年2月までに表現形、関連、序説・総説・属性総則の委員会原案を国立国会図書館（以下NDL）へ送付。
 - ・残りは、注記、主題関連、関連指示子以外の付録（構成を示すだけでも）、用語集。提出分についても例示の追加など。
 - ・データ作成例はNDLで書誌調整連絡会議に向け準備する。現行NCRと新NCRで作成したMARC例など。
 - ・2016年夏までに全体案公開に向けた残作業、2016年秋から冬にかけて関係機関との調整、検討集会、パブリックコメントの聴取、試行データ作成・評価などを実施する予定である。
2. 2015年度第7回目録委員会記録（資料12）について確認した。

[検討事項]

1. 表現形（表記の形式）について
資料5について以下のように説明と検討を行った。
 - ・#5.X.8の色彩について、RDA本文中に"Single colour"、選択リストに"monochrome"という類義語が出現するが、使い分けが難しい。単色はモノクロと見なすと解釈し、それがわかるように訳出する。
 - ・色彩の記録の方法で、モノクロか多色かはリストから選択する方式であるが、リストと

選択結果の例示との違いがわかりにくく混乱するため、例示は削除する。

- #5.X.4.4.1 は「文字種とは、資料の言語内容の表現に使用される文字の集合である。記号の集合をも含める」のように修正する。

2. 資料に関する関連について

資料 3、4 について以下のように確認した。

- 例示が不十分な部分を補う。
 - 他の関連の章との整合性を確認する。
 - 資料 6 の「関連指示子」は RDA の付録 J をもとにしているが、説明部分は切り離して 43.5 の関連指示子の項に組み込みたい。
 - 資料 7 の 44 章「資料と個人・家族・団体との関連」を比較すると、通則の中の「記録の範囲」、「機能」の構成が異なっている。「機能」の項目を設けた方が良いということから、44 章の形に合わせることにする。
- ※46 章「個人・家族・団体間の関連」（村上委員）の章立てについても同様に、44 章に合わせた形とする。

3. 関連指示子（著作、表現形、体現形、個別資料の間の関連）について

資料 6 について以下のように説明、検討を行った。

- RDA の付録 J と異なり、相対する関連指示子をページ上に並列で記述しているが、この方式を採用する。
- 指示子の表示順を、左側の列の語の 50 音順とした。
- リストアップされている用語以外の語で探す可能性が考えられるものは、参照を出すなどの工夫をしてはどうか。あとは索引にまかせる。
- 前項 2 の通り、RDA にあった説明部分は 43 章へ組み込む形を検討し、付録は指示子のリストのみとする。
- NDL へは RDA 原文も残したまま提出する。

4. 資料と個人・家族・団体との関連（著作、表現形）について

資料 7 について以下のように説明、検討を行った。

- 作成者に対する関連指示子をすべて「作成者」とし、他の役割の個人・家族・団体には関連指示子を使用しないという任意省略規定を設けた。作成者の存在を際立たせるとともに、作業の簡素化を意図したものだが、RDA にはなく、積極的に追加したいという意見がないため、削除する。
- #44.1.0、#44.2.0 の通則の冒頭に体裁を整えるため一文を追加した。「#44.1 では～」と項番号から始めたが、「ここでは～」や「本章では～」のように書き替えを検討する。
- #44.1.1 で主要な作成者のみがコア・エレメントであるという別法を設けた。ここに限らず、コア・エレメントに任意省略や別法が存在しても良いのかという疑義が提示されているが、結論は出ていない。
- letterer について「文字デザイナー」となっているがわかりにくいという意見あり。定義を再確認する。
- 著作、表現形、体現形、個別資料と関連を有する個人・家族・団体の例示の形式について、RDA では"Authorized access point representing the ○○ for"という句の後ろに、ISBD を使った体現形が来るイメージである。だが、これでは体現形以外の実体では不一致が生じる。

- ・典拠形アクセス・ポイントの形も想定したが、これでは作成者名が重複してしまうため、RDAに倣った形で良いのではないか。関連指示子を使った例示はRDAでは見られない。関連指示子を使わないのであれば、「○○の著者」のように説明をフレーズ的に書く形で良いのではないか。
- ・最終的には関連指示子は50音順とし、説明を加える。

5. 序説、総説、属性総則について

資料11 属性総則について、以下のように説明と検討を行った。

- ・本則と別法の異同の示し方について、前回の委員会で決定した方式を適用している。
- ・#1.4.1の書誌階層構造について、「任意の書誌レベルを記述対象として、書誌データを作成することができる」としながら、次の「単巻単行資料の場合は、それ自体を基礎書誌レベルとする」という文以下ではこうするようという推奨が提示されており、不連続であるという意見があった。
- ・この説明で基礎書誌レベルが一義的に決まるか？
- ・基礎書誌単位が利用者から見て不自然なものにならないよう、現行NCR程度に緩やかに判断できるようにしている。
- ・階層のある雑誌の場合、(例：○○学報.A, ○○ジャーナル)では、どこが基礎書誌レベルとなるか。説明によると「○○学報～」と読めるがそれで良いか。
- ・物理レベルで書誌データを作成する場合、対応する著作は全体という理解で良いか。著作⇔表現形⇔体现形のリンク関係で、通常、複数の体现形はバリエーションを示すが、2巻セットの上巻、下巻それぞれが同じ著作レコードにリンクされるとバリエーションの場合と区別がつかず、問題ではないか。
- ・記述の基盤の説明で「終号に関する言及が必要か」という点が未決になっている。
- ・「優先言語・文字種の選択」を総説に、「目録用言語・文字種」を属性総則で説明している。しかし、目録用言語は関連指示子に使用する言語など、属性以外にも関わるものであることから、総則へ移すこととする。また、目録用の言語に加えて文字種が問題になることは、日本では考えづらいので、「目録用言語」のみとする。
- ・#1.9.2の優先情報源の下の項目は、前から順に適応するのかどうかをチェックしていく流れになっている。例えば、#1.9.2.1.1には「洋資料」という項目がないが、#1.9.2.1.1の直下の説明を見れば良いことになる。フローで見ればわかりやすいが、項目名から探そうとするとわかりにくく、混乱を招くのではないか。項目立てについてより良い方法がないか検討する。
- ・#1.9.2.1.2Cで「洋図書(国内刊行のもの除く)」となっている。上記のフロー上、この記述で良ければ問題ないが、国内刊行の洋書を和洋どちらで扱うかという問題では、TRCが和書扱い、NACSIS-CATでは洋書扱いと齟齬がある。要検討。
- ・#1.9.2.1.2D「ヨーロッパの初期活字資料」はヨーロッパと限定して良いか。NDL案では「初期活字資料(和古書・漢籍を除く)」となっていた。

次回以降の委員会の予定

- 1月23日(土)
- 2月13日(土)
- 3月19日(土)